

---

# 日番谷さんのついてない一日

あさぎ 翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

日番谷さんのついてない一日

### 【Nコード】

N4754BA

### 【作者名】

あそぎ 翠

### 【あらすじ】

タイトル通り、負けっぱなしな日番谷さんのお話

## 前編

ピピッ ピピッ ピピッ

不愉快な音がする。

そう思い、俺は音源へ向かって手を伸ばした。

「朝か・・・」

頭と体が重い。どうにか体を起こそうと、うつ伏せの状態から両膝を折り曲げ腕の力を借りて頭を持ち上げようとしたが、その前に布団の魔力に負けた。珍しい。いつも目覚ましが鳴る前には起きるんだが。そう言えば前に目覚ましの音を聞いたのは何時だったか・・・。最近聞いた気もする。そうだ。先週顔を洗っている時に鳴り出して・・・って、それは目覚ましに起こされたわけじゃねえな。

そこで俺はガバリと頭を上げた。時計の針は八時三十分を過ぎている。

「ヤベエッ!」

俺は布団を跳ね除け大急ぎで死覇装に着替えた。飯なんか食ってる暇はねえ。歯と顔を洗い入念に髪型を整え、鏡越しに時計を見ると始業五分前。室内の惨状をそのままに、隊首羽織を羽織り氷輪丸を掴むと走って隊舎と向かった。

なんとか始業前に隊主室に辿り着き、俺は一つ深呼吸して戸を開けた。

「おはようございます、隊長。珍しく遅いですね」

俺はいつも通り眉間に皺を寄せて適当に挨拶を返す。弱みを見せではならない。もしもコイツの触覚に触れたら何が起こるか分かつ

たものじゃないからだ。

席に着き雑多に積まれた書類を仕分ける。今日中、もしくは近日中に処理しなければならぬものは意外に少ない。この程度なら一時間ほどで終わる筈だ。そう考えながら回覧板を眺めていると松本がお茶を持って現れた。

「たーいちよ。なんか眠そうなので、濃い目のお茶にしてみました」  
「ん。ありがとう」

途中、聞き捨てならない言葉が挟まれていた気がしたが、深く考えず湯飲みを口に運んだ。

後で考えてみればこの時のこの行動こそが、正に松本の言葉を証明していたのだ。

つまり、俺はボケていた。

「あちっ！」

「あら、大丈夫ですか？隊長」

ゴン バシヤ

何も考えずに口に運んだお茶は思った以上に熱く、慌てて湯飲みを置こうとして机の縁にぶつかり中身を自分の膝の上にぶちまけた。

「あっちー！」

「きゃー、大変！！火傷しちゃう。早く脱いで、脱いで！」

「脱げるか、バカッ！」

俺は立ち上がってバタバタと袴を振った。程なくして袴は冷えたが、濡れた布地が膝に張り付いて気持ち悪い。松本に着替えてきたらどうかと言われたが、別に汚い物でもないし何よりも面倒臭い。そのうち乾くだろうと放っておく事にした。

改めて机に向かう。

硯に水を入れ墨を持ち、努めて心を静めた。精神統一をして墨をする。気持ちを落ち着かせなければまともに仕事が出来ない気がしない。

何だつて今日はこんなに……。

俺は朝からの事を思い出し眉間に皺が寄った。と同時に腕にも力が入る。

ボキッ ビシヤッ ピシユッ

ああ、なんかもう、いろいろと諦めたほうがいいのか？俺……。朝起きてから小一時間で、これだけの事が起きるってどうなんだよ。折れた墨が墨汁を弾き飛ばし硯に当たって止まった。机と真つ白い料紙の上に放射状に伸びる墨汁。見れば隊首羽織にも点々と黒い色が飛び散っている。俺は顔にも感じた汚れを落とすため席を立った。

「松本、悪いがコレ洗濯に出しといてくれ。顔洗ってくる」

「はあ……」

俺は諦めにも似た長い溜息をついた。トイレで顔を洗い全て落としたか鏡で確認していると、実は顔だけに留まらず、耳や首にまで小さな飛沫が付着しているのが発見された。まあ、隊首羽織も汚れていた事を考えれば首に付くことぐらいちよつと考えれば分かる事なんだが……。こんな事なら部屋へ戻って心置きなく洗うんだつた。とりあえず目立つ汚れを全部拭い取り、顔を拭こうと懐に手を入れてガツカリした。手ぬぐいが無い。

つくづく寝坊なんてするもんじゃねえな。

俺は開き直つて死覇装の袖で顔を拭いた。

そうさ、俺はもともと流魂街のクソガキだ。こんな事で落ち込むほどヤワな神経してねえ！

頭の片隅に居る冷静な自分が、微妙に荒んできたなと思った。

隊主室に戻ると松本は居なかった。羽織を洗濯に出しに行つてくれているのだらうと思ひ自席へ向かう。机の上は綺麗に拭かれており「墨はすつて置きました」と彼女の字でメモが置かれ、椅子の上に替えの隊首羽織が置かれている。時々妙に気が利きすぎなんだよなあ、と独り言ち、その好意に感謝した。

さあ、仕事だ。

ドタバタしているうちに随分と時間が経ってしまった。それでもまあ、昼までには終わるだらう。

昼……。昼かあ。腹減つたなあ。

そう思うと急に胃の辺りがキューツと締め付けられる感じがした。今日はまだ何も口にしていない。朝のお茶ですら未遂だ。

そう言えば前に浮竹から貰つた菓子か机の中にあつたはず。

俺が一番上の引き出しの奥から手の平に乗るほどの小さな箱を取り出した。

松本もいねえし、食べながら仕事すつか！

何故そこに松本が関係あるのかというツツコミは捨て置いて、慎重に蓋を開け机の上に置く。今日の短い時間の中で自身に起きた事を考えれば当然の事だ。中身は美しい型抜き和三盆。砂糖であるにも拘らず、控えめな甘さで爽やかな口どけの高級和菓子。一つ摘んで口へ放り込む。

うめえ。

次々と口へ運びそうになる衝動を抑え、とにかく仕事を片付けることにした。

書類を二つ三つ処理する毎に一つ摘む。

そんな事を数回繰り返した後だった。指先が箱の底に当たったの

は。

へ？なんで？

箱を開けた時は指先ほどの砂糖菓子が縦横に四つ三段入っていたはずである。そんな五十個近くある菓子を食べきるほど仕事をした覚えはない。不思議に思っただ菓子の箱を眺めていると、机の向こうから小さな手によきつと生えた。遅れてピンク色の髪が覗く。

「草鹿・・・」

何をしているとは聞かない。菓子を食っているのは一目瞭然だ。

「何時からそこに居た」

いくら仕事に集中していたからと言っても、人が入って来た事に気がつかないとは・・・。

「ひつつん、ずるい」

は？

「一人でこんなに美味しいもの食べようとして」

いや、お前にほとんど食われたが。

草鹿はとぼとぼと隊主席を回り込みこそこそ何かを始めたかと思つと、振り返りにっこりと笑う。

「バツとしてあたしを捕まえられたら、コレ返してあげる！」

草鹿が後ろ手に隠していたものを目の前に突き出すと、すぐさま瞬歩で消えた。

「コラッ、待て！」

草鹿が手に持っていたものは俺の刀留めだった。

失敗した。つい、うっかり、その場の勢いで飛び出してきたしまつたが、アレがないと困るということはないのだ。草鹿だって人から取ったものを捨てたり失くしたりすることはないだろう。ただ、遊びに付き合わなかつたら返さない可能性はあるが・・・。という

事は、結局走り回らなければならないという事か。

はあ……。

溜息がこぼれる。とにかく草鹿を探し出そうと、俺は目を閉じて感覚を研ぎ澄ませた。

チツ、霊圧消してやがる……。

周りを見回せば、隊士たちがぞろぞろと一箇所に向かって歩いていた。そう言えば先程昼休みの鐘が鳴っていたのを思い出す。あの隊士たちは皆食堂へ向かっているのだろう。という事は草鹿も。

俺は急いで食堂へ向かった。

食堂は隊士たちでごった返していた。汁物の匂い、煮物の匂い、焼き魚の匂いが俺の胃を刺激する。鳴りそうな腹を腹筋で無理矢理押さえつけ、給仕に当たっている隊士に尋ねた。

「草鹿副隊長でしたら鐘と同時に見えになられて、あちらでお食事しておられましたか」

隊士が示した方向に草鹿の姿は無かった。そのまま食器下げ口へ視線をずらす。

いた。

「ありがとな！」

俺が人混みを掻き分けて突き進むと、騒ぎを聞きつけた草鹿は一瞬目を合わせ、笑顔で手を振って逃げ出した。

何とか食堂から脱出した俺は、屋根の上で途方に暮れた。無駄に広範囲に移動している草鹿の霊圧を感じたからである。

何と言うか……動きたくねえ。

食堂で刺激された腹がぐうと自己主張してくる。

……飯食おう。

別に急いでいるわけではないのだ。そう思って立ち上がったところで、今日の俺の運の無さを思い出した。

地獄蝶が飛んでくる。間違いなく俺に向かって。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4754ba/>

---

日番谷さんのついてない一日

2012年1月12日23時56分発行